

論文

フォックス晩餐会

—ホイッグ党の政治観—

正木慶介

キーワード

一九世紀初頭 イギリス政党政治 ホイッグ党 C・J・フォックス フォックス晩餐会

はじめに

一九世紀初頭のイギリス議会では、ホイッグ党とトーリア
党の二大政党が顕著な成長を見せた。^① 両党はそれぞれC・
J・フォックスと首相ウィリアム・ピット(小ピット)と
いうカリスマ的指導者に対する忠誠や友情が核となり、そ
の一体性が形成されていた。互いに政敵として認め合った
フォックスとピットは、奇しくも共に一八〇六年にこの世
を去った(前者が九月一三日で、後者は一月二三日)。し
かし、重要なことに、彼らの政治的影響力はその死後も持

続することとなる。彼らの死後以降、両党は共に決定的な
リーダーシップを欠き、また、党内で共通した政策を持つ
ことが困難になった。しかし、両党の議員は、自らをフォ
ックスの友、あるいはピットの友と位置づけ、その原理原
則(「フォックスの諸原理」、「ピットの諸原理」と呼ばれた)
に対する支持表明を繰り返す中で、党内に共有された政治
的エートスを獲得していったのである。^②

両党においてフォックスとピットが重要な位置を占め
ていたことを示す一例は、フォックス・クラブとピッ
ト・クラブの設立、および、彼らの名が冠せられた晩餐会

(dinner) の開催に会いだすことができる。³⁾ ロンドン・ピット・クラブ（以下LPCと略記）は一八〇八年に設立され、ロンドン・フオックス・クラブ（以下LFCと略記）はフオックスの生前の一七九〇年に設立された。フオックス晚餐会とピット晚餐会は、両者の誕生日（もしくはその前後）に開催されることが多かった。⁴⁾ 参加者は、テーブルに並ぶ豪華な食事や酒を楽しみながら、指導者の偉業を讃える演説を行い、また、それに耳を傾け、共に祝杯をあげた。⁵⁾

両クラブ、および両晚餐会について、これまで多くの歴史家が言及してきた。フランク・オゴアマンは、一九世紀初頭に、ロンドンを中心とする大都市において、多数のフオックス・クラブとピット・クラブが設立されたと指摘する。彼によれば、二つの陣営に分かれた党派的集団は、フオックスとピットそれぞれの指導者の原理原則から成る共通の大義をもとに相争っていた。⁶⁾ 一方、レズリ・ミッチェルは、一八二〇年までにフオックス晚餐会が全国で開催されたと論じつつ、⁷⁾ 同晚餐会とピット晚餐会の政治的重要性の非対称性を強調する。彼は、フオックスとピットを比較し、後者の偶像化を促した実例として、胸像の制作、ピットという洗礼名の付与、「いくらかの晚餐会」(some dinners) の開催を認めるものの、こうした慣行は一般的とはならず、また長続きもしなかったと主張する。ミッ

チェルによると、「ピットは尊敬されたかもしれないが、フオックスは愛されたのである」。⁸⁾ また、ミッチェルは、一八二〇年代末から一八三〇年代初頭にかけて制定された改革法、すなわち一八二八年の審査法・自治体法の撤廃、一八二九年のカトリック解放、一八三二年の選挙法改正を支持する議論の中で、フオックスの名前が何度も呼び出されたと指摘している。ピットとフオックスの死後の影響力の持続性については、一八三〇年代初頭までと考える歴史家が多かった。しかし、近年、マイケル・レジャローマスによつて修正的見解が示され、それは一九世紀の半ばまで持続したことが明らかとなっている。⁹⁾

こうした先行研究（レジャローマスの研究を除く）の問題点は、十分な実証調査を踏まえ提示されたものではないという点にある。近年特にピット・クラブ（晚餐会）については研究が進展してきているが、フオックス・クラブ（晚餐会）についての実証研究はいまだ不足している。よつて本稿では、可能な限りピット・クラブ（晚餐会）と比較検討しつつフオックス・クラブ（晚餐会）を分析することで、後者に相対的に重要な政治的役割を見出ししてきた先行研究の評価がどの程度妥当であるのかを検討していきたい。

本稿は二つの章で構成される。そこでの考察を経て明らかにされるのは、先行研究が示したものと大きく異なる

フォックス・クラブ（晩餐会）の姿である。第一章では、フォックス・クラブ（晩餐会）の構造的特徴について検討し、LFCが首都における議会ホイッグ党にとつての重要な政治的結節点となっていた一方で、それ以外の地域においてフォックス・クラブが設立された例は見当たらず、また、フォックス晩餐会が開催された地理的範囲がかなり限定的なものであったことを明らかにする。第二章では、主に、フォックス晩餐会において行われた演説に注目しながら、なぜフォックス・クラブ（晩餐会）が一般的な現象とならなかったのかについて考察を加える。

一九世紀初頭のイギリス政治を扱った近年の先行研究の多くは、この時期にホイッグ党が重要な変容を遂げたことを強調している。例えば、W・A・ヘイによると、ホイッグ党は、一八世紀末までロンドンにしか目を向けない貴族的党派であったが、一九世紀初頭において、法廷弁護士ホイッグ党下院議員ヘンリー・ブルームが公論を議会に巧みに持ち込む請願戦術を考案したことを契機に、地方都市の改革派中産階級と強固な関係性を築くに至った。この結果、ホイッグ党は一八三〇年一月に政権に返り咲くことに成功し、ヴィクトリア期の「ホイッグ・リベラルの優越」が確立された。こうした解釈に対し、本稿は、ホイッグ党と議会外改革運動（あるいは改革派中産階級）の関係は必ず

しも常に安定的ではなかったことを指摘し、さらに、ブルームが果たしたとされる政治的役割についても多くの留保が付されるべきであると論じる^⑤。以上の考察を踏まえ、全体の議論を通じてホイッグ党の政治観を明らかにし、最後に、一九世紀初頭にそれが変容したことを強調する議論に対し修正的の見解を提示したい。

第一章：フォックス・クラブ（晩餐会）の構造的特徴

まず、LFCの検討から始めたい。LFCを分析する際に直面する最も困難な問題は史料の不足にある。特に、設立以後の約二〇年間、それがどのような活動を行っていたのかについて知ることは極めて難しい。また、一八一〇年代から一八三〇年代初頭の活動についても、断片的な記録がクラブに所属したホイッグ党議員の手稿文書や新聞に時折表れるのみである。本章では、不十分ながらも利用可能な史料に依拠し、可能な限りLFCの諸特徴や実態を明らかにしていく。

活動記録がほとんど公開されなかったという事実は、LFCの「私的」な性格を表している。当時のイギリスのアソシエーション文化において、結社がその活動の一端を新聞等のメディアを利用し明らかにすることはごく日常的な

フオックス晚餐会(正木)

ことであつた。例えば、LPCは、政治的メッセージを公衆に伝えるべく、『モーニング・ポスト』など保守系新聞の記者をピット晚餐会やその他の会合に呼び、パンフレットの出版も積極的に行つた。対照的に、LFCはこうした活動をほとんど行っていない。クラブの会員の中には、リベラル系新聞『モーニング・クロニクル』の所有者兼編集者ジェイムズ・ペリがいたが、このことは、公的な場でクラブが政治運動を展開することには結びつかかなかつたようである。

結社の特徴を定義する際に、目的、規約、会員の三点がしばしば参照される。このうち、LFCに関して明らかとなるのは会員のみである。ホランド家文書に残る会員記録には、計五九名の名前が記載されている。そのうち一一名の名前が消されているが、彼らの多くは死去を理由にLFCを離れた。その死亡年から推測するに会員記録が最後に更新されたのは一八一五年前後である。いつ記録がつけ始められたのかは不明だが、フオックスが死去した後であることは間違いない。会員はおそらく五〇名に限定されており、何らかの理由で欠員が生じた場合に新たな会員が認められた。この点はLFCの閉鎖性をよく表している。会員の大多数は議員や地主層が占めたが、少数ながら法律家や新聞編集者(前述のペリ)もこれに所属した。所属議員は、

フオックス亡き後党を牽引するグレイ伯爵やホランド男爵(フオックスの甥)といった党の指導層から、古参保守派のフィッツウィリアム伯爵やロバート・スペンサー卿、若手改革派のジョン・ラッセル卿やJ・G・ラムトンと多様であつた。彼らは議会会期中に毎月一度会合を開いた。ここでは党の政策についても討議されたはずである。

会員に加え、毎年一月末にLFCの主催で開かれたフオックス晚餐会の出席者を部分的に明らかにすることもできる。一八一四年、一八一六年、一八一七年、一八一九年、一八二一年の五つの晚餐会に関しては、比較的多く出席者の名前が新聞に載つた。表では、それら出席者計一五一名のうち両院議員(経験者含む一〇一名)をリストした。

表から、LFCが、ホイッグ党の首都における重要な結節点となつていたことがわかる。両院議員は、一九名の上院議員と八二名の下院議員(現職七四名)で構成されて

表 LFCフオックス晚餐会出席者

上院(貴族院)議員	
1	H.R.H. Duke of Sussex
2	Duke of Bedford
3	Duke of Devonshire
4	Duke of Leinster
5	Duke of Norfolk
6	Marquess of Lansdowne
7	Earl of Albemarle
8	Earl of Besborough
9	Earl Gowper
10	Earl Fitzwilliam
11	Earl Grey
12	Earl Grosvenor
13	Earl of Rosslyn
14	Earl of Thanet
15	Baron Erskine
16	Baron Holland
17	Baron Ponsonby
18	Baron St. John
19	Baron Save and Sele

いる。一八一二年から一八三〇年の間、党の下院議員が約一五〇―二〇〇名で推移していたこと、さらにリストが晚餐会出席者全てを網羅できているわけで

下院(庶民院)議員

1	Lord George Cavendish
2	Lord Copwer
3	Lord Crewe
4	Lord Henry Fitzgerald
5	Lord William Fitzgerald
6	Lord Archibald Hamilton
7	Lord Howick
8	Lord Kinnaird
9	Lord Milton
10	Lord Morpeth
11	Lord Normanby
12	Marquess of Tavistock
13	Lord John Russell
14	Lord William Russell
15	Lord Robert Spencer
16	Lord John Townshend
17	Sir John Aubrey
18	Sir Ronald C. Ferguson
19	Sir Robert Heron
20	(Sir) James Macdonald
21	Sir James Mackintosh
22	Sir Arthur Pigott
23	Sir Matthew W. Ridley
24	Sir George Robinson
25	Sir Samuel Romilly
26	Sir William Rowley
27	Sir Robert Wilson
28	Hon. James Abercrombie
29	Hon. Henry G. Bennet
30	Hon. Lawrence Dundas
31	Hon. Thomas Dundas
32	Hon. William R. Maule
33	Hon. George Ponsonby
34	(Hon.) General George Walpole
35	Colonel William L. Hughes
36	Colonel George J. Roberts
37	Captain Charles Adam
38	Adair, Robert
39	Adam, William
40	Allen, John H.
41	Barclay, George
42	Barnett, James
43	Barrett Lennard, T.
44	Bernal, Ralph
45	Birch, Joseph
46	Brougham, Henry
47	Byng, George
48	Calvert, Charles
49	Carter, John
50	Chaloner, Robert
51	Coke, Thomas W.
52	Combe, Harvey C.
53	Concannon, Lucius
54	Creevey, Thomas
55	Denison, William J.
56	Denman, Thomas
57	Erskine, David
58	Ellice, Edward
59	Graham, James R.G.
60	Grant, John P.
61	Gordon, Robert
62	Honywood, William P.
63	Horner, Francis
64	Hume, Joseph
65	James, William
66	Kennedy, Thomas F.
67	Lambton, John G.
68	Martin, Henry
69	Moore, Peter
70	North, Dudley
71	Ord, William
72	Russell, Matthew
73	Russell, Robert G.
74	Scarlet (Scarlett), James
75	Taylor, Michael A.
76	Tierney, George
77	Thorp, John T.
78	Walthman, Robert
79	Warre, John A.
80	Wharton, John
81	Whitbread, Samuel
82	Wyvill, Marmaduke

* 灰色の議員は現職でない

はないことを踏まえると、ホイッグ党所属議員の多くが晩餐会に出席していたと言える。また、当時の新聞に依拠する限り、LFCが主催したフォックス晩餐会に、「議会同院の全てのホイッグ党議員が出席する」ことが見込まれる場合もあった。

会員と晩餐会出席者の観点から、LFCとLPCを比較してみよう。まず、晩餐会に関しては、LFC主催の晩餐会に多数のホイッグ党議員が参加し、同様に、LPCの主催する晩餐会にトリー党議員の多くが出席した。しかし、重要な差異もある。例えば、ピット晩餐会は、党の団結を強化する役割を果たすことに最終的には失敗していた。一八一〇年代後半以降、ジョージ・カニングなどカトリック解放を支持するリベラル派トリー議員の多くは、

晩餐会に出席することを拒否した。カニングは一八一〇年代初頭まで晩餐会の運営者の一人であり、彼がピットを讀めるべく作詞した「嵐を乗り切った舵手」(The Pilot that weathered the Storm)は晩餐会で好んで歌われた。しかし、カニングは、LPCが「プロテスタントの優越」(Protestant Ascendancy)を定期的祝杯の一つに定めること、それを反カトリック的とみなし、一八一七年にクラブとの決別を公言した。これ以降、ピット晩餐会は、どちらかというど宗教政策に対し保守的態度を取る者が集う場所となっていた。

会員に関しては、LFCが閉鎖的な制度を採用したのに対し、LPCの門戸は広く、一八一六年までに約一三〇〇名の会員を集めた。しかし、特徴的であるのは、LFCが

党指導部を中心に多様な立場の議員が会員となったのに対し、トリー党議員の多くはLPCの会員とはならなかったということである。LPCの会員リストには、二五名の上院議員、三九名の下院議員の名前しか見つけることができず、さらに、リストの中には、一八二二年から一八二七年までトリー内閣の首相を務めたリヴァプール伯爵や、一八三二年以降保守党の党首となるロバート・ピールなど、重要なトリー党議員の名前がない。⁽²³⁾ これらのことから、LPCは門戸を両院議員や地主層の外側に広く開放したものの結果的にトリー党議員の結節点としての役割を担えなかったのに対し、LFCは相対的に閉鎖的な組織であったがゆえに多様な立場のホイッグ党議員を引きつけることに成功し党の結束を強める役割を果たすことができた⁽²⁴⁾と結論づけることができるだろう。

それでは、ロンドン以外の地域において、フォックス・クラブはどれほど設立されたのであろうか。また、その程度は、ピット・クラブと比較した場合どのように評価できるのか。次に、これらの問題について検討していきたい。

まず強調されるべきは、「フォックス」という名のついたホイッグ系政治結社は、ロンドン以外では組織されなかったということである。確かに、フォックス晩餐会は複数の都市で開催されたが、それはフォックス・クラブの主

権によるものではなかった。つまり、「フォックス」の名を冠した地方組織としては、一定程度恒常的に存在するクラブではなく、年に一度の行事であるフォックス晩餐会のみが存在したのである。

加えて、フォックス晩餐会の地理的広がりが限定的であった点も指摘しておくべきことであろう。フォックス晩餐会が開催された都市と年を列挙すると、イングランドにおいて、イプスウィッチ（一八二二年）、ニューカッスル（一八一三年、一八一四年、一八一七年、一八一八年）、ノリッジ（一八二〇―一八二二年）、ブリストル（一八一三年、一八一五年）、ベリ（一八二二年）、ヨーク（一八一九年）、リッチフィールド（一八一四年）、次にスコットランドにおいて、アープロース（一八二二年）、エディンバラ（一八〇一年、一八〇四年、一八〇八―一八二五年）、クーパー・アングラス（一八一一年）、グラスゴウ（一八〇一年、一八一〇―一八二五年）、ダンデイ（一八一〇年、一八一一年）となる⁽²⁵⁾。つまり、イギリス全土において、これらにロンドンを足した計一三の都市においてフォックス晩餐会は開催されたことになる。この数字は、ピット・クラブが設立された都市の数と比較するとかなり小さい。ピット・クラブは、ランカシャー州やヨークシャー州を中心に六二の都市（マンチェスターやリーズなど選挙区以外の都市も含む）で設立された。

それらは、晩餐会以外にも定期的に会合を開き、必要に応じて地域の世論を動かすための政治活動を展開した。²⁵⁾こうした諸特徴を踏まえると、地方におけるホイッグの組織的な活動は、トリーのそれと比較すると、同等どころかかなり程度の低いものであったと判断せざるを得ない。

第二章.. フォックス晩餐会に見られるホイッグ党のエリート主義的立場

フォックス晩餐会は、ピット晩餐会のように一般的な現象とはならなかった。これはなぜだったのか。本章では、その理由を説明すべく、フォックス晩餐会において明らかにされたホイッグ党議員の政治的見解を検討していく。

地方都市のフォックス晩餐会は、ホイッグ党指導部や改革に熱心なホイッグ党議員の主導で開催された。彼らのほとんどはLFCの会員であった。例えば、ニューカッスル晩餐会は、ノーサンバーランド州に所領を持つグレイ伯爵が中心であったし、ノーフォーク晩餐会（ノリッジにて開催）とサフォーク晩餐会（ベリとイプスウィッチにて開催）は、ノーフォーク公爵とアルベマール伯爵によって主導された。晩餐会には、貴族・ジェントリ層に加え上層中産階級も出席し、議事は新聞で報道された。

史苑（第七八巻第一号）

地方都市のフォックス晩餐会は、ホイッグ党議員、および彼らの地方における支援者が支持する政策を公けに示す場であった。晩餐会で支持された政策は幅広く、国内問題に関しては、議会改革、奴隷制廃止、参政権に関わる宗教的差別撤廃、行財政改革、集会・出版・請願の自由など市民的権利の擁護に及んだ。また、国外問題に関しては、ヨーロッパ大陸諸国で起こった、ウィーン体制に抵抗する自由主義運動が支持された。こうした政策はほとんどの場合、²⁶⁾専制権力に対する抵抗運動を擁護するという文脈で語られた。

こうした自由主義的な政策を正当化するために、フォックス晩餐会はフォックスの名を巧みに利用した。ここでは、議会改革問題に絞って検討していくこととしよう。フォックス晩餐会が地方都市で開催された一八一〇年代後半から一八二〇年代初頭はE・P・トムスンが「民衆的急進主義の英雄時代」と呼んだ時期にあたり、一八一五年に終結した対仏・ナポレオン戦争後の経済不況を背景に、改革派中産階級や労働者階層が議会改革運動を展開していた。晩餐会で演説を行ったホイッグは、概して、一年制議会（毎年下院総選挙を行う制度）と男子普通選挙制といった急進主義的改革案に反対し、漸進的で穏健な改革を支持した。²⁸⁾ 彼らは、ほとんどの場合具体的な改革案を示さなかつ

たが、改革を支持する態度を表明する際にしばしばフォックスの威光を借りるといふ顕著な特徴を見せた。例えば、一八二二年八月二一日のサフォーク晩餐会において、下院議員のジェイムズ・マクドナルドは、「フォックス氏は常に議会改革の必要性を確信していた」と指摘し、続けて、「もしも彼が今生きていて、公論に反して政府が続けた戦争の後の七年間の闘争を目にしたとしたら、彼はそれをより強く確信しただろう」と主張した。また、同じ晩餐会で議長を務めた地元の名士サー・ヘンリー・バンベリは、一七九七年五月二六日にフォックスが下院において演説を行った際に、「家屋所有者に選挙権を拡大することは議会改革に関する最良で最ものを射た案である」と述べた文言を引用し、同様の改革の必要性を訴えた。⁽³⁰⁾

当然のことながら、フォックス晩餐会はピット・クラブ（晩餐会）への対抗意識を持つていた。例えば、一八二二年のサフォーク晩餐会で、ジェイムズ・マクドナルドは、ピット・クラブを、現トリー政権を支える抑圧的な「ピット体制」(Pitt System) の出先機関と評し攻撃した。⁽³¹⁾ また、一八二〇年一月二〇日に開催されたノーフォーク晩餐会で、下院議員のT・W・クックは、「政治的腐敗に反対する者が現政権による誤った統治体制に盲目であるということとはありえない」と論じ、「抑圧の体制は、偉大な舵手

(the great pilot) を模倣する取るに足らない舵手たち (the little pilots) によつてもたらされた」と主張した。⁽³²⁾ こうした事例が示すように、ピットとフォックスの対抗関係は、彼らの死後も、少なくともホイッグにとつては、イギリス政治のあり方を規定する要素の一つとなつていた。

なぜフォックス・クラブ（晩餐会）は、一九世紀初頭のイギリスにおいて一般的な現象とならなかつたのであろうか。その大きな理由の一つは、都市社会で重要な地位を築いていた中産階級の求めるリベラルな改革に対し、ホイッグ党が具体的な政策をもつて応答することができなかったことにある。例えば、上述のように、フォックス晩餐会に出席したホイッグ党議員は、原則として議会改革を支持する態度を明らかにしたが、一方で、そのための具体的なアジェンダを示すことはほとんどなかつた。これはなぜだつたのだろうか。ここでは、ニューカッスル晩餐会を例に分析することにした。

一八一四年九月二三日に開催された最初のニューカッスル晩餐会は、ノーサンバーランド州選出の下院議員で、LFCの会員でもあつたサー・チャールズ・モンクが議長を務めたが、それ以降はホイッグ党の指導者であるグレイ伯爵がその役を担つた。晩餐会は主に貴族・地主層によつて運営されたが、商人、弁護士、銀行家など上層中産階級も

出席した。後者のグループのうち法廷弁護士であったジェームズ・ロッシューは、グレイの晩餐会への出席に関して、以下のように日記に記した。「私は、彼が議会改革について多くを語ることは分別のないことであると考えた。というのも、彼がそれを遂行するための明確な計画と時機について確約することを避けるであろうことは明白であったからだ³³」。改革派中産階級は明確なアジェンダを求めていたが、ホイッグ党議員はこれに応じることができなかった。このことが原因で、ホイッグ党議員は晩餐会を組織する上で、困難な状況に陥っていたのである。そのことを例証するように、グレイは、ニューカッスルにおける最後のフォックス晩餐会の直前一八一八年一月二五日（晩餐会開催五日前）に、妻に宛てた手紙の中で、「このフォックス晩餐会がいかに私を苛立たせているか、私はあなたに言うことができませぬ³⁴」とその内心を語っている。一八一八年以降、フォックス晩餐会を開催する計画が皆無だったわけではない。しかし、改革派中産階級は、ロッシュー同様、ホイッグ党がはつきりとした改革案を示すことができないのであれば晩餐会の開催は無駄であると考えた。一方で、グレイをはじめとするホイッグ党議員は、どの程度の改革案であれば、伝統的な国制を損なわずに中産階級を満足させることができるか判断しきれないでいた。こうした状況下で、結

局、彼らは晩餐会の開催を断念するに至ったのである。

この事例のみからホイッグ党が地域社会において置かれた一般的な状況を説明することは難しい。しかし、少なくとも、一八一八年から一八二二年まで積極的に活動を続けたヨーク・ホイッグ・クラブと、一八二一年から一八二九年まで存続したチェシャ・ホイッグ・クラブは、議会改革をめぐり保守派と革新派（後者のグループの多くは中産階級の出自であった）が反目することとなった結果衰退していった。こうした事実を踏まえると、ニューカッスル以外の様々な地域でも、ホイッグ党と改革派中産階級は、急進主義との差異化をはかろうとする点では一致したものの、具体的な議会改革案については同意に至ることができなかったと推察される。

フォックス晩餐会が一般的現象とならなかった別の要因は、フォックスというアイコン自体が、議会外改革運動を牽引するための装置としてあまり効果的でなかったことに求められる。というのも、労働者階層出身の急進主義者のみならず、改革派中産階級の多くにとっても、フォックスがどこまで真剣に議会改革に向き合っているのかは疑わしかったからである。実際フォックスは、議会改革に対する積極性の点で、公的発言と私的発言の間で相当の温度差があった³⁵。生前フォックスは、この点に気がついた一部の改

革派から批判を受けていた。例えば、一七八三年に、クリストファ・ワイヴィルは、新聞紙面にて、「フオックス氏の支持者および彼自身は、イングランドの人民が議会改革という偉大な事業のために彼の口から発せられた巧みな演説に満足していると考えているのだろうか」（傍点原文イタリック）と疑問を呈した。彼は続けて、「騙されているのは彼の友人なのであって、決してイングランドの人民ではない」と論じている。³⁸⁾

また、他の要因として、ホイッグ党指導部が議会外アソシエーションに懐疑的であったことも考慮する必要がある。当時の国家エリートのはほとんどは、議会外組織の政治的影響力が、議会の立法権や政府の行政権を脅かす程度にまで拡大してはならないと考えていた。³⁹⁾ 議会主権を信じる彼らにとって、「国家内国家」(state within a state; imperium in imperio)、「あるいは「対立議会」(Anti-Parliament)という考え方は許容できるものではなく、結社やアソシエーションは潜在的にこうした危険な存在になり得ると考えられた。例えば、グレイ伯爵は、カトリック解放が焦眉の急となっていた一八二八年一月二日に、J・G・ラムトン宛の手紙の中で、反カトリック運動を展開するブランズウィック・クラブに対抗することを目的とした、親カトリック派の議会外アソシエーションを設立する必要

はないと断言した。もちろんグレイは、公的集会と請願という公衆による伝統的な意見表明の方法を否定しなかった。しかし、彼にとってホイッグ党がなすべきは、議会外圧力団体の組織ではなく、議会の中で演説と採決によってカトリック解放を支持することであったのである。⁴⁰⁾

もちろん、こうした議会主権の支持と表裏の関係にある議会外アソシエーションに対する懐疑心は、トリーにも共有された。確かに、事実として、一九世紀初頭におけるトリー系議会外政治結社の展開には目をみはるものがある。上述のように、ピット・クラブはブリテン島全土に設立された。加えて、ブランズウィック・クラブはイングランドで四〇以上、アイルランドで二〇〇以上設立され、反カトリック派のオレンジ・ロッジの設立数はブリテン島で二二八（一八三〇年）、アイルランドでは一〇〇〇以上にのぼった。これらの組織は、民衆的急進主義（一八一〇年代後半）、カトリック解放（一八二〇年代末）、選挙法改正（一八三一—一八三二年）という明確に反対すべき対象があり、喫緊の課題として抵抗運動を繰り広げた。しかし、こうしたトリー系結社も自らの活動領域を議会外に限定し、議会と政府に過度に圧力をかけることのないよう自制していた。⁴¹⁾ グレイ伯爵をはじめホイッグ党指導部にとって、自らの政策を達成するために不可欠と考えられたのは、議会外ア

ソシエーションではなく、政権交代であった。彼らはいかに優れた政策を提示、あるいは達成できたとしても、優れた政治家が政権を運営しない限り良き統治は成し得ないと考えた。グレイはこの点を強調するために、一八一八年のニューカッスル晩餐会において、「フオックス氏の知恵は私の指針である」と強調し、フオックスが著した後期ステュアート期に関する歴史書(註)の中から以下の部分を引用した。

過去に起きた専制政治のうち最も多くは、合法的な形式をとって現れた。(中略)このことを踏まえるならば、以下の考えほど間違っているか、誤解されているか、あるいは有害なことではないように私には思える。つまりそれは、(中略)議会改革が国に救済をもたらす唯一の政策であるとする考え方である。(中略)チャールズ二世の治世は、良き法と悪しき統治の治世であった。(中略)その時期に我々の国制は、それまでの歴史において最も優れた理論的完成の域に達した。(中略)しかしその後何が起きただろうか。抑圧と困窮である。それらは、戦争、疫病、飢饉といった外的で偶発的な原因によって引き起こされたのではないし、ましてや、そうした誇るべき国制の完成を損なう可能性のある法の改変によって引き起こされたのでもなかつ

た。それらは、腐敗した邪悪な政府によって引き起こされたのである。国制に内在するあらゆる優れた抑制機能がそれを防ぐことができなかった。法律が全てであると考えるのは、なんと虚しく無意味でおこがましいのであろう！ 人ではなく政策 (measures, not men) が重要であるという考え方によって打ち立てられた原理ほどもなく有害なものはない。(註)

一八世紀以降、議会政治家は、「人と政策」(men and measures)と「人ではなく政策」(measures, not men)という二つの考え方のいずれを支持するかで大きく二分された。前者は、統治する者と政策が共に重要であると考え方であるのに対し、後者は、誰が政権についていようと優れた政策が推進されていれば良き統治は成し得るとする考え方である。ホイッグ党議員の多くは、グレイ同様、フオックス晩餐会において前者を支持する立場を明らかにした。例えば、一八二一年のサフォーク晩餐会で、アルバートル伯爵は、「人と政策の変更が絶対に必要である」と主張し、ホイッグが党としてトリー政権に取って代わるべきだと訴えた。(註)ホイッグ党議員は、在野の立場から改革を主張することを重視した。しかし、彼らの多くは、それだけでは十分でなく、改革を達成し結果として良き統治をも

たらずためにも、党として政権を担う必要があると考えた。

この点に関して、ヘンリ・ブルームは大きく異なる考え方を持っていた。彼は「人ではなく政策」を重視する立場を取った。彼は一八二八年一月二十九日の下院演説において、「私が重視するのは政権についている閣僚が誰なのかではなく、彼らの政策なのです。もしもその政策が優れているのであれば、（中略）政府は心からの誠実で積極的な支持を受けるべきなのです」と論じた⁽⁴⁶⁾。彼は、自らが優れていると考える政策を達成するために、議会外勢力と密に関係を結び政府・議会に圧力をかけることを肯定した。また、政策の達成の見込みがある場合は、敵対する政権に参加しても構わないと考えた。実際に彼は、カトリック解放の達成を期待して、一八二七年にジョージ・カニング首相率いるトーリ内閣への支持を表明し、彼の助力で三名のホイッグ党議員が入閣した。しかし、グレイをはじめ他のホイッグ党議員の多くは、「人ではなく政策」の立場に反対し、ブルームらの行動を強く批判した⁽⁴⁷⁾。

この点に関連して、ブルームがホイッグ党において周辺的存在であったことを示唆するのが、彼が著した『ジョージ三世期に活躍した指導的政治家に関する史的素描』（初版一八三九年）である。この中の「フォックス氏」という項目で、ブルームはフォックスを非常に高く評価している。

ブルームにとって、フォックスは、宗教的寛容、市民的自由、政府による腐敗行為やアメリカ植民地への抑圧に対する反対、奴隷貿易廃止という優れた政策を支持する「最も偉大な政治的指導者の一人」であった。しかし、ブルームは、フォックスの政党政治家としての側面を「汚点（defect）」と捉え、「政党原理を唯一の行動基準とした」フォックスを批判した。ブルームは、「フォックス氏の政治的諸原理はホイッグ学派（Whig School）の真の模範の上に形成された」と述べフォックスを賞賛する一方で、「しかし、彼は常に、政党の長として、状況に応じてその諸原理に手を加えてしまった。その結果、彼の野心や彼の追隨者の利益が彼の行動に関する支配的な基準となってしまったのである」と論じた⁽⁴⁸⁾。

ブルームは「政党の諸効果」という項目においても、政党を極めて否定的に評価している。彼の主張は概略以下の通りである。政党政治家は、たとえどんなに偉大であっても、彼が属す政党の利害に縛られ、他の政党と無駄に互いに反目し合うため、国益に適う優れた政策を実行することができない。政党は原理原則を掲げることがあっても、それは結局私利の隠れ蓑にすぎない。ホイッグとトーリの二大政党ともに貴族主義的であり、常に権力を追いかめるがゆえに、人民の意向を気につけない。むしろ両政党

の政治家は自らの意見を人民に押し付けようとしている。ブルームは、「政党政治家が意見を形成する際に人民の声を排除することは、どんな体制であれ根本的な悪である」と主張し、続けて「人民の力を国家全体の原動力とせず、人民を寡頭制の道具や手段にすることは、単なる欠点であるどころか破滅的なことである」と論じている。このような政党観を持ったブルームが「人ではなく政策」の理念を支持したのは当然のことであつたと言えよう。

フォックス、政党、人民の政治的役割に対するブルームの認識は、グレイ伯爵らホイッグ党多数派のそれと大きく異なつていた。後者にとって、フォックスは掛け値なしに重要であり、無条件で肯定すべき存在であつた。また、政党は、圧政に対抗し優れた政策を実行するために必要不可欠であつた。さらに、彼らは人民の政治的役割を重視したが、一方で、彼らにとつて人民は究極的には「従」の存在にすぎなかつた。これらのことから、ホイッグ党内におけるブルームの立場は周辺のなものにとどまつたと考えられるべきであり、彼が党の性質を大きく変えるほどの影響力を持つていたと断言することには少なからぬ留保が付されるのである。

ホイッグ党議員の多くは、ブルームよりもエリート主義的であつた。フォックス・クラブ（晩餐会）の組織化が一

般的現象とはならなかつたこと自体が、ホイッグ党におけるエリート主義の一つの帰結であつたと言えるが、また、フォックス晩餐会が開催された場合であつても、そこで明らかとなつたのは、ホイッグ党（特にその指導層）と議会外の改革派中産階級との不安定な関係性（あるいは、後者を「従」にとどめ、議会政党こそが政治的イニシアティブを握るべきだとする前者の態度）であつたのである。一八三〇年末にウエリントン公爵が自ら率いたトリー政権において議会改革法案を提出する準備はないと公言したとき、グレイ伯爵が指導するホイッグ党は政権交代の千載一遇の好機を得た。重要であるのは、ホイッグ党が初めて具体的で包括的な議会改革のアジェンダを示したのは、政権交代後のことであつたという点である。ホイッグ政権による議会改革法案に対して、議会外の改革派は様々な評価を下したが、結果的にはそれを受け入れる方向でまゝつていった。このことから、改革問題をめぐり政治的に妥協したのは、ホイッグ政権ではなくむしろ世論の方であつたという解釈を導き出すことができよう。また、こうした一八三〇年代初頭の一連の出来事は、ホイッグ党議員がフォックス晩餐会において明らかにした、彼らにとつての「望ましい政治のあり方」に則して進んだようにも見える。

結論

フォックスというアイコンは彼の死後もホイッグ党の一性を支える重要な要素であり、LFCおよびロンドンでのフォックス晩餐会は、党の首都における重要な結節点として機能した。一方で、LFCの私的な性格、あるいは閉鎖性といった側面についても改めて指摘しておきたい。ピット・クラブがブリテン島に広く設立されてゆく中、それに対抗する政治組織として、彼の政敵であったフォックスの名を冠したものが現れたことには一定の必然性が見出せる。しかし、強調すべきは、ロンドンの外では、フォックス・クラブは設立されなかったし、フォックス晩餐会も地理的分布や持続性の点でかなり程度の低いものであったということである。こうした事実が、フォックス・クラブ（晩餐会）の大都市におけるプレゼンスの高さを強調してきた先行研究に大きな修正を迫る。一八二八年から一八三二年にかけて改革運動が広がる中、地方においてフォックスの名はほとんど叫ばれなかったかもしれない。少なくともフォックス晩餐会は、この時期に一度も開催されなかった。この点に関して、近年注目される「民衆的保守主義」(popular conservatism)とも関連するピットというもう一つのアイコンの（フォックスというアイコンとは異なっ

た）意義に今一度注目すべきかもしれない。⁵³⁾

フォックスの名は、議会ホイッグ党を團結させるのには役立つが、大都市における改革派に訴える装置としては効果的に機能しなかった。ヴィクトリア期に入ると、LFCは私的な性格をさらに強め、政治の表舞台には出てこなくなる。また、ロンドン以外でフォックス晩餐会が開催された事例を見つけることもできなくなる。おそらく、フォックスというアイコンは、一九世紀初頭のみならずそれ以降の時期においても、基本的に、国家エリート文化圏においてのみ重要な政治的意味合いを持ったと推察される。⁵⁴⁾

ブルームに注目することでヘイが特徴付けたヴィクトリア期の「ホイッグ・リベラルの優越」のあり方も、一定程度見直す必要があるだろう。確かに、この時期の大半、ホイッグ党（自由党）は政権を担ったが、ブルームの政治観に沿って政策決定を行っていたかどうかは疑わしい。ここでは一例として、人民の議会政治への関与について考えてみよう。アンガス・ホーキンスは、一八三〇年代から一八六〇年代までのイギリス政治文化を「議政体」(Parliamentary Government) という概念を用いて捉えようとしている。議政体においては、議政党が国制の中心に位置するようになり、下院で多数を占める政政が政

権を運営した。そして、「政党の目的とは、国王大権への腐敗した依存から行政府を保護し、かつ、議会主権を保存すべく、議会討論を有権者の命令から防護することにあつた」^⑤。政党にとつて、議会外の声は重要ではあるが、「従」の存在以上の役割を与えられるべきではなかった。あくまでも、政治のイニシアテイヴは、議会议党が持つべきであると考えられたのである。こうした国制における政党の重要性は、青木康が明らかにしたように、一七八〇年にヨークシャ運動が展開する中で、ロッキンガム派ホイッグ（フックス派ホイッグの前身的政党）によつて積極的に主張された^⑥。このことに鑑みるならば、ホイッグ党の政治観について、我々は、一九世紀初頭における変容よりも、むしろ一八世紀末からヴィクトリア期半ばまでの連続性にこそ目を向けるべきなのであろう。

註

- (1) この時期の政党政治については Frank O'Gorman, *The Long Eighteenth Century: British Political and Social History 1688-1832*, second edn., Bloomsbury Academic, 2016, chapters 8-12.
- (2) Boyd Hilton, *A Mad, Bad, and Dangerous People?: England 1783-1846*, Clarendon Press, 2006, pp. 203-5. フォックスがホイッグ党に与えた同様の影響については N.B. Penny, 'The Whig Cult of Fox in Early Nineteenth-Century Sculpture', *Past & Present*, 70, 1976, p. 94.
- (3) 「政治的晩餐会」については Peter Brett, 'Political Dinners in Early Nineteenth-Century Britain: Platform, Meeting Place and Battleground', *History*, 81, 1996, pp. 527-52; Mark Baer, 'Political Dinners in Whig, Radical and Tory Westminster, 1780-1880', *Parliamentary History*, 24, 2005, pp. 183-206.
- (4) フォックスの誕生日は一月二十四日であり、ピットのそれは五月二八日であった。
- (5) フォックス・クラブとピット・クラブは、それぞれ形態と役割を大きく変えながら現在も存続している。前者はロンドンに、後者はピットの出身大学であるケンブリッジ大学にある。Leslie Mitchell, 'Charles James Fox', in Charles Sebag-Montefiore and Joe Mordaunt Crook (eds.), *Brooks's 1764-2014: The Story of a Whig Club*, Paul Holberton Publishing, 2013, p. 30; W.M. Fletcher, *The University Pitt Club: 1835-1935*, Cambridge Univ. Press, 1935.
- (6) Frank O'Gorman, *Patrons and Parties: The Unreformed Electorate of Hanoverian England, 1734-1832*, Clarendon Press, 1989, p. 332.
- (7) L.G. Mitchell, *Charles James Fox*, Oxford Univ. Press [OUP], 1992, p. 262.
- (8) Idem, 'Charles James Fox', in Brooks's, p. 30.
- (9) Idem, 'Charles James Fox', *Oxford Dictionary of National Biography [ODNB]*, online, accessed 28 July 2017. トナムドについては同様の参照。
- (10) Michael Ledger-Lomas, 'The Character of Pitt the Younger and Party Politics, 1830-1860', *Historical Journal*, 47, 2004, pp. 641-661.
- (11) Keisuke Masaki, 'The Development of Provincial Toryism in the British Urban Context, c.1815-1832', unpublished PhD thesis, University of Edinburgh, 2016, chapter 2; idem, 'Within the Bounds of Acceptability: Tory Associational Culture in Early-19th Century Britain', *Parliamentary History*, forthcoming; J.J. Sack, 'The Memory of Burke and the Memory of Pitt: English Conservatism Confronts its Past, 1806-1829', *Historical Journal*, 30, 1987, pp. 623-640.
- (12) W.A. Hay, *The Whig Revival, 1808-1830*, Palgrave Macmillan, 2005, pp. 1-5, 176-9. 類似した議論を展開する研究として Jonathan Parry, *The Rise and Fall of Liberal Government in Victorian Britain*, Yale Univ. Press, 1993, pp. 72-78.
- (13) 今回の研究に対し、ブルーム個人を検討した結果得られ

- た成果をあまりにも安易にホイッグ党全体に適用してつらと批判を加える研究者が多い。Austin Mitchell's review of *The Whig Revival, 1808-1830* by W.A. Hay, *English Historical Review*, 120:487, 2005, pp. 847-848.
- (14) Peter Clark, *British Clubs and Societies 1580-1800: The Origins of an Associational World*, Clarendon Press, p. 265.
- (15) Cecil Powney, *History of the London Pitt Club*, privately printed by Harrison and Sons, 1925, p. 20.
- (16) 例えは Pitt Club (London), *The Pitt Club. The Commemoration of the Anniversary of Mr. Pitt's Birth-Day ... on Saturday the 27th of May, 1815*, London, T. Davidson, 1815.
- (17) Duke of Bedford, Earl Grey, Earl Fitzwilliam, Marquis of Downpatrick, Lord St. John, Lord Holland, Lord Say & Sele, Lord Robert Spencer, Lord G.A.H. Cavendish, Lord Morpeth, Lord John Russell, Mr. Serjt. Lens, Sir Arthur Pigcott, Samuel Whitbread, Esq., Rt. Hon. Mr. Baron Adam, George Byng, Esq., Mr. Serjt. Runnimgton, Mr. Serjt. Heywood, Henry Martin, Esq., James Perry, Esq., Robert Adair, Esq., William J. Denison, Hon. W. Maule, Sir Thomas Bell, W.G. Adam, Esq., Charles Calvert, Esq., Charles Fox Townshend, Esq., Francis Horner, Esq., Robert Greenhill Russell, Esq., General Ferguson, John Allen, Esq., James Barnett, Esq., W.L. Hughes, Esq., Henry Tripp, Esq., James Humphreys, Esq., Hon. George Ponsomby, Dudley North, Esq., Edward Ellice, Esq., John Warton [Wharton], Esq.,

Captain Charles Adam, R.N., Sir John Throckmorton, Bart., J.G. Lambton, Esq., Sir M.W. Ridley, Bart., Sir Charles Monk-Monck, Bart., Mr. R.W. Clarkson, Hon. L. Dundas, Hon. George Petre, Duke of Norfolk, Duke of Devonshire, T.W. Coke, Esq., Lord Crewe, Lord Cowper, Sir Thomas Mostyn, W.H. Whitbread, Marquis Tavistock, W.P. Honynwood, Lord Petre, Mr. Stephenson, and Mr. Searlet. British Library, Holland House Papers, Ms. 51516. これに加え、アルンモール伯爵が一八一六年五月半ばに会員となったものがある。 *Norfolk Chronicle and Norwich Gazette*, 1 June 1816.

- (18) 例えは、チャールズ・グレイが(会員記録にあるものに)グレイ伯爵 (Earl Grey) とするのは一八〇七年のことである。
- (19) *Morning Chronicle [MC]*, 26 Jan. 1814, 25 Jan. 1816, 25 Jan. 1817, 25 Jan. 1819, 29 Jan. 1821.
- (20) Austin Mitchell, *The Whigs in Opposition 1815-1830*, OUP, 1967, pp. 60-61.
- (21) *Hampshire Telegraph and Sussex Chronicle*, 1 Feb. 1819.
- (22) Masaki, 'Provincial Toryism', pp. 109-115.
- (23) Powney, *London Pitt Club*, pp. 37-71.
- (24) シリビュパスウイチの晩餐会は共にサフォーク・フォックス晩餐会の名で開かれた。なお、フォックス晩餐会に加え、スナック・サーの都市でホイッグ系結社が設立された。スコットランドのフォックス晩餐会については T.E. Orme, 'The Scottish Whig Party, c.1801-20', unpublished PhD thesis, University of Edinburgh, 2013, chapter 3.

- idem, 'Toasting Fox: The Fox Dinners in Edinburgh and Glasgow, 1801-1825', *History*, 99, 2015, pp. 588-606.
- (25) Masaki, 'Provincial Toryism', chapter 2, esp. pp. 84-85.
- (26) ノーフォーク晩餐会(一八二一年)でのノーフォーク公爵の演説を参照。MC, 22Jan. 1821.
- (27) E.P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, new edn., Penguin, 1968, p. 660.
- (28) ニューカッスル晩餐会(一八一七年)でのグレイ伯爵の演説を参照。MC, 25Sept. 1817.
- (29) 一八二〇年のノーフォーク晩餐会にて議長を務めたアルマール伯爵が、三年制議會の導入、腐敗選挙区全ての廃止、大都市への議席再分配、直接税を支払っている男性全員に対する選挙権の付与を支持したように、一部例外はあった。 *Ibid.*, 26Jan. 1820.
- (30) *Ibid.*, 24Aug. 1822.
- (31) *Ibid.*
- (32) *York Herald and General Advertiser*, 29Jan. 1820.
- (33) Edward Hughes (ed.), *The Diaries and Correspondence of James Losh*, vol. II, Surtees Society, 1963, p. 86.
- (34) G.M. Trevelyan, *Lord Grey of the Reform Bill: Being the Life of Charles, Second Earl Grey*, Longmans, Green, and Co., 1920, p. 163.
- (35) Peter Brett, 'The Liberal Middle Classes and Politics in Three Provincial Towns - Newcastle, Bristol, and York - c.1812-1841', unpublished PhD thesis, University of Durham, 1991, chapter 2, esp. pp. 67-68; 正木慶介「チェルシー・ホイッグ・クラブ：一八二〇年代イギリスにおける地方ホイッグと議會改革」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』六〇輯、第四分冊、二〇一五年、六九一-八二頁。
- (36) John Wade, *A Political Dictionary: or Pocket Companion*, London, T. Dolby, 1821, pp. 33-37.
- (37) Mitchell, *Charles James Fox*, pp. 252-261.
- (38) *York Chronicle*, 22Aug. 1783, quoted in Mitchell, *Charles James Fox*, p. 254.
- (39) Masaki, 'Within the Bounds of Acceptability'.
- (40) 対立議會については、青木康「議會外勢力の成長：一八世紀末のイギリス政治」『歴史学研究』六五九号、一九九四年、三一-四〇、七三頁；古賀秀男「チャーティスト運動の構造」(『ネルヴァ書房』一九九四年)、第二部。
- (41) Peter Jupp, *British Politics on the Eve of Reform: The Duke of Wellington's Administration, 1828-1830*, Palgrave Macmillan, 1998, p. 362.
- (42) Masaki, 'Within the Bounds of Acceptability'.
- (43) C.J. Fox, *A History of the Early Part of the Reign of James the Second*, London, William Miller, 1808.
- (44) MC, 6Jan. 1819.
- (45) *Bury and Norwich Post*, 21Feb. 1821.
- (46) *The Parliamentary Debates from the Year 1803 to the Present Time*, second series, vol. XVIII, London, Thomas Curson Hansard, 1828, p. 55.
- (47) Hay, *Whig Revival*, pp. 140-9. 『ウィットハム』の異なる説明をよむ。 Mitchell, *Whigs in Opposition*, pp. 194-202.
- (48) Henry Brougham, *Historical Sketches of Statesmen who Flourished in the Time of George III*, Paris, A. and W.

Galigani and Co., 1839, pp. 99-109.

(49) *Ibid.*, pp. 167-173.

(50) ニューカッスル晩餐会(一八一七年)のグレイ伯爵の演説七、サフォーク晩餐会(一八二二年)のジェイムズ・マクドナルドの演説を参照。MG, 25 Sept. 1817, and 24 Aug. 1822.

(51) ブルームは、演説家・著述家としての才を高く評価されながらも、ホイッグ党指導部からの篤い信頼を得ることに結局は失敗してゐる。Michael Lobban, 'Henry Brougham', *ODNB*.

(52) 議会外において、改革の程度をめぐる対立する諸個人・諸集団に対し、ホイッグ政権による改革法案を(少なくともひとまずは)受け入れるよう説得を試み、結果的にその法案を支持する公論を創り上げたのが、政治連合(Political Unions)であった。Nancy D. LoPatin, *Political Unions, Popular Politics and the Great Reform Act of 1832*, Macmillan, 1999.

(53) Ledger-Lomas, 'Character of Pitt', pp. 651-655. 近年の「民衆的保守主義」研究にこゝつは、Matthew Roberts, *Political Movements in Urban England, 1832-1914*, Palgrave Macmillan, 2009, chapters 6 and 7.

(54) レジャーローマスの研究においても、ヴィクトリア期においてフォックスというアイコンに強いこだわりを見せた人物として言及されるのは、ジョン・ラッセル卿やホルランド男爵などホイッグ貴顕に代る。Ledger-Lomas, 'Character of Pitt', pp. 644-649.

(55) Angus Hawkins, *Victorian Political Culture: Habits of*

Heart and Mind, OUP, 2015, p. 104.

(56) 青木康「ホイッグ党とヨークシャー運動」『史学雑誌』八七編二号、一九七八年、一―三五頁。

【付記】本稿は、二〇一七―二〇一九年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究B、課題番号17K13562)による研究成果の一部である。

(早稲田大学文学学術院助教授)

※訂正

本論文につきまして、左記の訂正がなされています。

〈一八五頁・末部〉(誤)「助教授」(正)「助教」

以上の誤りを謹んでお詫び申し上げます。

立教大学史学会史苑編集委員会

Fox Dinners: The Whig Party's View of Politics

MASAKI, Keisuke

フ
オ
ッ
ク
ス
晩
餐
会
(
正
木
)

By examining the London Fox Club and the Fox dinners, both of which declared support for the political principles of the dead leader of the Whig party, Charles James Fox, this article will reveal this party's view of politics. In early-nineteenth-century Britain, according to the existing literature, the Fox Clubs and dinners played a vital role in Whig politics in many towns and helped the Whigs get involved in the reform movement between the late 1810s and the early 1820s. Contrary to a popular view as such, this article points out that the Fox Club was established only in the capital, while the Fox dinners were held in twelve local towns as well as in London. These Whig associations named after Fox were not so popular as their Tory counterparts, namely the Pitt Clubs, which were established in more than sixty towns in Britain. The London Fox Club was a significant rallying point for the Whig party, but it was a more private and exclusive organisation than the London Pitt Club.

There were several reasons why the Fox dinners were not popular or widespread in urban communities. First, the liberal middle classes, who were a powerful political force in commercial and manufacturing towns, considered the Fox dinners useless, because such dinners failed to propose a set of reform measures that would meet their political demands. Second, while the name of Fox was significant as an icon for the parliamentary Whigs, it was not effective enough to draw support from the liberal middle classes, because Fox was regarded by these classes as an aristocratic politician who did not eagerly support reform. Third, the Whig party was unwilling to develop extra-parliamentary political associations, which the party thought might be dangerous enough to interfere with the legislative power of Parliament and the executive power of the government. These reasons suggest that the Whig party then was an elitist political group, who was not always successful in collecting support from broader public opinions, and from the liberal middle classes in particular.

In conclusion, it is emphasised that three elements were vital as components of the Whig party's view of politics: the principles of Fox, or the 'cult' of Fox; the idea that parliamentary parties had significant roles in the British constitution; and the notion that the people or the middle classes outside Parliament had an important political role, but at the same time they should be led by the parties in Parliament.